

子どもの学習自己評価に基づく剣道の授業改善

西田 理 絵¹大江 淳 悟²

本研究では中学校の剣道の単元において、試合形式の練習を早い段階で取り上げる単元計画を用いて、「攻防の展開」に至るまでの授業を行った。また、単元の途中と最後に学習者が記入した「自己評価シート」を活用して、学習者の思考や状況の変化について把握することで授業改善を図った。その結果、試合をすることで学習者の剣道に対する理解は深まるが、他者の試合を観察することも学習効果が高いことがわかった。また、単元の早い段階で剣道の知識を習得できることは、技能向上への近道ともなり得る。しかし、知識を理解したり体現したりする能力には個人差があるので、学習者には技のポイントを焦点化した言葉がけを随時行い、学習者全員が目標である「攻防の展開」まで到達することが出来る方法を検討する必要がある。本研究で活用した「自己評価シート」は、学習者の問題点を見つけたり、今後の指導の手立てを検討したりすることに有効であった。

Keywords : 剣道、授業改善、自己評価

1 はじめに

平成24年4月より「武道」が中学校保健体育科の授業において必修化され、学校現場では主に柔道と剣道が取り上げられている。剣道においては専門の体育教師が少ないことに加えて、授業を実践することが難しい理由がいくつかある。例えば、防具の着脱に時間を費やすこと。「他の運動領域では小学校から体系的な指導がなされているのに対し、剣道は中学校で初めて行う生徒が多いこと。加えて剣道には、礼法と独特な姿勢や動きを基本動作として学ぶ必要があり、慣れるまでに多くの時間を費やすこと¹⁾」である。しかし、現行の中学校学習指導要領における「剣道」の内容は、第1学年及び第2学年では「相手の動きに応じた基本動作から、基本となる技を用いて、打ったり受けたりするなどの攻防を展開すること²⁾」とされ、第3学年では「相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技や得意技を用いて、相手の構えを崩し、しかけたり応じたりするなどの攻防を展開すること²⁾」とされている。つまり、「攻防

の展開」が中学校の剣道の授業では求められ、限られた時間数の中で基礎からこの段階まで発展させるのは、剣道の授業を困難にさせている最大の理由といえるであろう。

剣道の授業を受ける学習者の実態として、「剣道具の装着に時間がかかる」「互いに打ち合うことに恐怖心を抱いている」「打突の機会が分からない³⁾」という問題を抱えていると指摘されており、その傾向は特に女子に多いと考えられる。そのような問題を解決するためには、相手を攻撃したり防御したりする楽しさを十分に味わわせ、「単元のなるべく早い段階から簡単な試合を取り入れることが有効である⁴⁾」。

学習者のほとんどが剣道の初心者ということは、運動自体に苦手意識がある学習者も運動が得意な学習者と同じスタートラインから始められ、劣等感を感じにくいことが利点である。単元初めに十分に知識を養い、意欲を高めておくことで運動の得意・不得意よりも理解力ややる気が試される。学習者は未体験だった動きを自ら確認しながら体現することを繰り返し行い、習得していくのである。しかし、「運動の初期段階では、実際に行った運動が意図している動きとどれだけ異なってい

1. 宮城学院女子大学非常勤講師

2. 宮城学院女子大学准教授

るのかという差異を学習者だけで見いだすことは困難である」⁵⁾。また学習者がある差異を感じる事が出来ているかを指導者が判断することも困難である。したがって、本研究では剣道授業の初期段階となる前半（4回目）と、試験や試合を行った最終回（7回目）の計2回、「自己評価シート」を学習者に記入させ、単元の途中や終了時における学習者の思考や状況の変化について把握し、教師の評価とのズレを解消していくことで授業改善の手立てとすることを目的とした。

2 研究の方法

2.1 対象者

中学校1年の女子生徒25名（剣道部所属の1名を除いて剣道未経験者）

2.2 時期

2018年8月30日から10月25日にかけての2週間続き授業を全7回（14時間分）

2.3 授業計画

剣道の授業を中学3年間のうち1学年のみが行うため、学習のねらいを「相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技や得意技を用いて、相手の構えを崩し、しかけたり応じたりするなどの攻防を展開できるようにする」とした。単元初めで行うオリエンテーションの時間に、教科書を使用して知識や礼儀の習得を行い、剣道のイメージを養うことによって、より効率的な技能の

獲得を図るようにした。

週1回2時間続きの授業構成は、防具の着脱に多少時間を費やしてもまとまった活動時間が取れることが利点ではあるが、次の授業までの期間が空くため、前回までの内容を忘れやすいことが欠点でもある。したがって、既習の内容を復習しつつ新しく学習する内容に活かしていけるよう配慮した。さらに、「単元の最初の段階からごく簡単な試合を取り入れることは、剣道の楽しさを味わわせることに有効である」⁶⁾ことから、しかけ技や応じ技を行う際にはやり方だけではなく、その技をくり出す前後の想像し得る状況を伝えてイメージさせ、4回～6回の授業で行う「試合形式の練習」に活用しやすいようにした（表1）。

最終の7回目には、試合をして一本を取った者が残って次の試合をまた行い、最後の勝者が剣道経験者の学習者に挑むという「勝ち残り試合」を行った。

また、単元の半ば（4回目）と最後（7回目）の授業後に自己評価シートによる調査を行った。

2.4 自己評価シート

学習者の知識や礼儀の習得、授業に対する満足感や達成感、意欲、欲求を知り、単元の後半や今後の授業改善に活かすために、自己評価シートを学習者に記入させた。

「剣道の学習についての自己評価シート」
①剣道の授業前よりも、剣道の知識が身に付い

表1 単元計画

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	
学習内容	①オリエンテーション ②準備体操 ③剣道の動き慣れ W-up ④基本動作 左座右起・構え立礼から構えと構えから納刀 ⑤素振り 面・小手・胴の打ち方	①準備体操	①準備体操					②自由練習 ③試験1 ・跳躍素振り ④防具の装着 ⑤試験2 ・試合形式 ⑤勝ち残り試合 ⑥まとめ ⑦質問紙記入
		②剣道の動き慣れ W-up ③素振り 前回の復習 + 小手・面 跳躍素振り ④垂と胴の装着 ⑤基本打突 (竹刀を使用し) 面・小手と胴の打ち方と受け方 ⑥約束練習	②素振り 前回の復習		③防具の装着			
		④基本打突 面・小手・胴の打ち方と打たせ方 ⑤基本打突の約束練習	④基本打突 面・小手・胴					
			⑤しかけ技 二段の技 (小手・面等)・払い技	⑤しかけ技 前回の復習と払い技・抜き技引き技	⑤しかけ技 前回までの復習	⑥応じ技 面抜き胴		
			⑥約束練習			⑦約束練習		
			⑦試合形式の練習			⑧試合形式の練習		
			⑧質問紙記入					

ていると感じますか。

②剣道の授業前よりも、礼儀が身に付いていると感じますか。

③これまでの剣道の授業で学習した成果について満足していますか。

④あなたは他の人より剣道が上手になっていると思いますか。

⑤あなたは剣道をもっと上手になりたいと思いますか。

⑥あなたは剣道の授業でもっとやりたいことはありますか。(選択・複数回答可)

⑦感想(自由記述)

①～⑤までの回答は、自己評価の低い方から高い方へ1～4段階で選択させた。

2.5 教師の評価

学習者が学習したことを体現できているか最終回到試験を行い、教師が評価した。評価の項目は素振り、礼儀と気剣体の観点から

①跳躍素振り

②立礼から構えまでと構えから納刀までの一連の動作

③気合の入った声

④試合に対する意欲や成果

の4項目を各5点の合計20点満点で採点をした。

3 自己評価シートの結果と考察

3.1 学習者の知識の習得

運動技能の習得は、「①試行錯誤の段階(運動技術が理解できていても動作がうまく行なうことができず、たまにうまくいくだけの段階)②意図的な調節の段階(注意する点や修正の方法がわかり、部分的技能を意識するとうまくいく段階)③自動化の段階(特別に意識しなくても瞬時に動きの判断ができるような段階)」⁷⁾を経て行われる。学習者に経験者がほとんどいない「剣道」では、特に①段階を行うための知識の習得が特に重要である。

自己評価シートによると、授業4回目よりも7回目の方が知識の習得ができたことを実感している学習者が増えていて、全体的にも数値は高い

(図1)が、剣道が初体験ということもあって教師が示した情報が多かったことを考えると、4回目の「ほとんど身に付いていない」という回答や、7回目の「少し身に付いた」という回答は意外である。学習者の謙虚さや自信のなさから出た回答とも考えられるが、教師が示した情報への理解が足りなかったとも考えられる。これらの回答をした学習者は出席番号が後ろの方の者が多く、授業を番号順に並んで行うことが多かったことも考慮すべき点である。

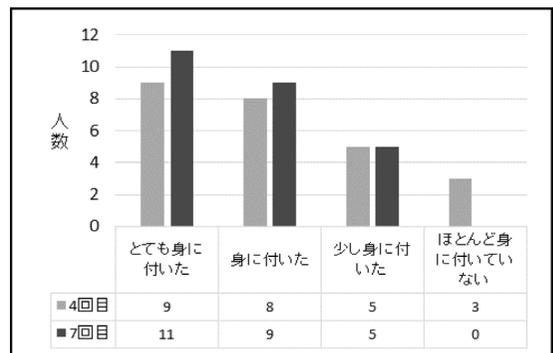


図1 剣道の授業前よりも、剣道の知識が身に付いていると感じますか。

3.2 学習者の礼儀の習得

授業では武道の特性でもある礼儀作法を取り上げ、意識させる場面を何度も設けた。初めは慣れない動作に戸惑う学習者が多いように見受けられたが、次第に慣れていき、礼の仕方や防具の扱いなどが板に付いてきた。

自己評価の結果を見ると、知識よりも礼儀の習得の方が実感していない生徒が多い傾向がある(図2)。4回目より7回目の方が「身に付いていない」と否定的な回答をした学習者は1人だけであったが、特に7回目における「少し身に付いた」の回答者数を0にしたいところである。ただし、知識の習得にあったような出席番号による特徴は見られなかった。礼儀の習得は実践しながら身につけたことがその原因と思われる。

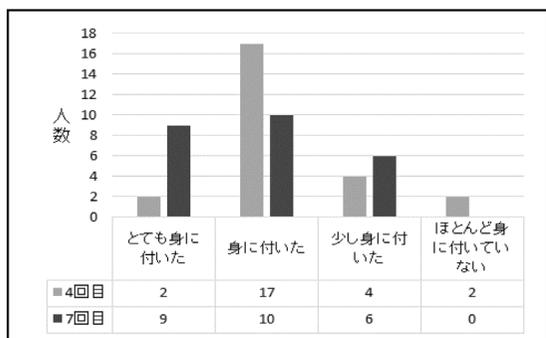


図2 剣道の授業前よりも、礼儀が身に付いていると感じますか。

3.3 学習者の授業への満足度

学習者の授業への満足度が高ければ、授業への意欲や関心も高く、効果的な授業ができていと考えられる。学習者の授業への満足度は高いといえる(図3)が、「あまり満足していない」と回答した学習者の感想(4回目)には、「暑い」や「頭を打たれると痛い」と身体的な苦痛を訴えるものが多い傾向があった。これは剣道を行う以上避けられないことであるが、剣道への理解を学習者が深めることができるような手立てによって解決できると考えられる。

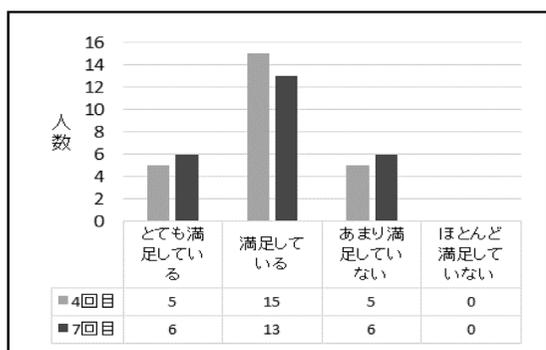


図3 これまで剣道の授業で学習した成果について満足していますか。

3.4 教師の評価別に見た自己評価シートの結果

教師による実技の評価は20点満点(平均14.5点)で採点し、点数別に上位群(17点以上)、中位群(13~16点)、下位群(12点以下)に分け、「勝ち残り試合」の勝ち数、学習者の自己評価の結果と比較した(表2)。

最も予想外の結果になったのは、「知識の習得」「礼儀の習得」「授業への満足度」における下位群の数値(7回目)の高さである。小学生対象の研究にはなるが「運動技能のレベルが高い児童ほど運動技能の評価が適切に行われている」⁸⁾ことや「技能が停滞していた群で、自己評価よりも相互評価の方が指導者による評価との一致率が高い」⁹⁾ことを考慮すると、中学1年の学習者においても、特に技能が停滞している下位群の自己評価が適切になりにくい傾向があるとも考えられる。また、下位群の「上手になりたいか」の項目も数値(3.3→3.7)が高いことから、意欲があるとは推測できる。自由記述の感想も「楽しかった」と回答する学習者も多いことから、授業回数をさらに重ねていけば、技能が身に付いていく集団になる可能性があるといえるであろう。

また、上位群は「知識の習得」や「授業への満足度」(4回目)で高い値が出ている。これは、他の群よりも早い段階で知識を理解できたと実感し、授業への成果を感じることができていると考えられる。

「勝ち残り試合」では、唯一の剣道経験者(上位群)は最後の勝者と戦う1戦のみの参加で、1勝に止まってしまったが、複数勝利した者が中位群に集まる結果になった。教師の評価による「試合」の項目は、「試合に対する姿勢」や「礼儀作法」をもとに評価したもので、勝敗は関係ないものとしていた。また、「勝ち残り試合」の勝敗数は成

表2 教師の評価別に比較した自己評価の結果と勝ち残り試合の勝ち数

	跳躍素振り	礼⇄構え	試合	声	教師の評価	知識の習得		礼儀の習得		授業への満足度		他者との比較		上手になりたいか	試合の勝ち数	
						4回目	7回目	4回目	7回目	4回目	7回目	4回目	7回目			
上位群(6人)	4.8	4.7	4.2	4.0	17.7	3.2	3.2	2.7	3.0	3.2	2.8	2.5	2.5	3.0	2.7	0.1
中位群(13人)	3.5	3.8	3.7	3.7	14.8	2.9	3.0	2.8	3.0	3.0	2.9	2.0	2.4	2.7	2.5	1.3
下位群(6人)	3.0	2.2	3.0	2.5	10.7	2.7	3.8	2.8	3.5	2.8	3.3	2.7	3.2	3.3	3.7	0.5

※教師の評価は「跳躍素振り」「礼⇄構え」「試合」「声」(各5点)を合わせた20点満点。

「知識の習得」「礼儀の習得」「授業への満足感」「他者との比較」「上手になりたいか」の項目は、より強く実感しているほど数値が高くなる(4点満点)。

績とは関係ないとも学習者に伝えていたこともあり、教師による「試合」の評価の高さが、実際の「試合の勝ち数」と相関するわけではない結果になった。「勝ち残り試合」を見ている限り、一本を取るまでの粘り強さや体力、負けず嫌いの性格の方が、少なくとも剣道初心者の段階では、勝利に結びついていたようである。

また、試合を待っている間に他の学習者の試合を観戦しながら学んだこともあり、順番が後の者の方が、攻防の展開に工夫が見られた。6回目の授業までは、授業の前半で技を覚えて、「試合形式の練習」の時間に2人組でそれぞれが一斉に実践することは行っていたが、学習者がじっくりと他の学習者の試合を観戦する機会は「勝ち残り試合」が初めてであった。試合の様子を客観的に見ることで、技を繰り出すタイミングや技の活用方法を学習していったと考えられる。

3.5 「勝ち」の有無別に見た結果

「互いに有効打突を争奪する中で生まれる駆け引きこそが剣道の醍醐味¹⁰⁾ではあるが、「勝ち残り試合」である以上、中学1年生では一本を取るまでの過程の駆け引きよりも、結果の勝敗に注目する傾向もあった。

1戦でも勝った者（以下「勝ち有り群」と）負けまたは引き分けの者（以下「勝ち無し群」と）を分け、勝ち残り試合の勝ち数、学習者の自己評価の結果と比較した（表3）。

教師の評価の4項目のうち、試合に関する3項目は「勝ち有り群」の方が数値は高く、教師の評価も高いが、「跳躍素振り」に関しては「勝ち無し群」の方が数値は高い。「跳躍素振り」に関しては、毎時間反復練習しても手足がうまく運動し

ない学習者がいた。「跳躍素振り」が苦手な分、「試合形式」の試験で点数を取り返そうと熱心に試合の仕方の練習をしたり発声練習をしたりする学習者もいた。試験のために行った試合に対する姿勢や意欲が、その後行われた「勝ち残り試合」でも活かされた面もあるのではないかと考えられる。さらに、跳躍素振りの出来・不出来は初心者段階の者による試合の勝敗には影響しないものと考えられる。

中学1年生では試合過程の駆け引きよりも、まだ結果の勝敗の方に注目する傾向があると先述したが、そうであると仮定すると、試合に勝つことで自己有能感が高まり、「あなたは他の人より剣道が上手になっていると思いますか」という他者との比較をした質問に高い数値を出すと推測していた。しかし、結果は「勝ち有り群」も「勝ち無し群」も同じ数値（2.6）を示した。ただし、4回目に行った自己評価シートの結果を比較すると、「勝ち無し群」よりも「勝ち有り群」の方が「他の人より剣道が上手になっていると思う」気持ちの数値が上昇する割合が高く、下降する者はいなかった（表4）。試合に勝った者は勝たなかった者と比較して、自己有能感が高まる傾向があったと考えられる。

表4 勝敗数別に比較した変動

	他者との比較（4→7回目）		
	上昇	不変	下降
勝ち有り（9人中）	5（56%）	4（44%）	0（0%）
勝ち無し（16人中）	4（25%）	9（57%）	3（19%）

また、「勝ち有り群」は試合後の自己評価シートの感想で、全員が「楽しかった」とコメントしていた。

表3 勝敗数別に比較した自己評価の結果と勝ち残り試合の勝ち数

	跳躍素振り	礼⇄構え	試合	声	教師の評価	知識の習得		礼儀の習得		授業への満足度		他者との比較		上手になりたいか	試合の勝ち数	
						4回目	7回目	4回目	7回目	4回目	7回目	4回目	7回目	4回目		7回目
						勝ち有り群（9人）	3.4	3.8	3.8	3.7	14.8	2.7	3.2	2.6		2.9
勝ち無し群（16人）	3.9	3.6	3.6	3.4	14.4	3.1	3.2	2.9	3.2	3.1	3.0	2.4	2.6	3.0	2.9	0.1

※教師の評価は「跳躍素振り」「礼⇄構え」「試合」「声」（各5点）を合わせた20点満点。

「知識の習得」「礼儀の習得」「授業への満足感」「他者との比較」「上手になりたいか」の項目は、より強く実感しているほど数値が高く表れる（4点満点）。

「勝ち無し」の「試合勝ち数」が0.1となったのは、引き分け場合0.5とカウントしたため

3.6 自己評価シート（4回目）で浮上した問題点に対して行った改善策

単元の半ばで自己評価シートを行った理由は、その時点で見つかった問題点を単元後半で改善する、または変化を見るねらいがあったからである。授業4回目で見つかった事例として3例挙げ、その後どのような指導や配慮を行い、どのように学習者が変化していったかについて以下に述べる。

事例1：剣道や自分に対して否定的なAさん

Aさんが授業4回目に行った自己評価シートの回答は以下の通りであった。

<Aさんの自己評価シートの回答・4回目>

- ・知識の習得 … ほとんど身に付いていない
- ・礼儀の習得 … ほとんど身に付いていない
- ・授業への満足度…あまり満足していない
- ・他者との比較（上手くなっていると思うか）
… 思わない
- ・上手になりたいか … 思わない
- ・やりたいこと … 何もない
- ・感想 … 「礼儀は剣道以外でも身につけることができる。将来使わない知識だと思う。」

全体的に否定的な感情を抱いており、非常に印象に残った自己評価シートであった。しかし、授業で見せるAさんはやる気がないわけではなく、不真面目な様子もなかった。ただ不満そうな表情を見せていたのは、自分が思うように動けていない様子の時や、基本を繰り返しているときだと判断した。したがって、新しい技を多く学習する単元後半では、Aさん本人が思っているよりもちゃんと出来ていることを認識させ、充実感を味わわせることが自己評価の向上につながるのではないかと考え、積極的に褒め、さらに技能が向上するような言葉がけを度々行った。その結果7回目に行った「勝ち残り試合」では学級最多の6勝を挙げ、自己評価シートでは、以下の様に変化を見せた。

<Aさんの自己評価シートの回答・7回目>

- ・知識の習得 … 身に付いた
- ・礼儀の習得 … 身に付いた
- ・授業への満足度 … 満足している
- ・他者との比較（上手くなっていると思うか）
… あまり思わない
- ・上手になりたいか … 思う
- ・やりたいこと … 何もない
- ・感想 … 「楽しかった」

勝ち数が多いにもかかわらず、「他者との比較」の回答に「あまり思わない」とした回答はまだ少し否定的ではあったが、上手になりたいと思えるようになったことと、感想の変化は大きいと言え、教師の働きかけが成功した事例と言えるであろう。

事例2：技能は高いが礼儀を軽んじるBさん

Bさんは運動全般に積極的に取り組み、剣道の動きの上達も早かった学習者である。しかし、行動に攻撃的な点があり、相手を思いやることが苦手なところもある。他の学習者や礼儀を軽んじる行動も度々見られた。Bさんの自己評価シート（4回目）の結果は以下の通りであった。

<Bさんの自己評価シートの回答・4回目>

- ・知識の習得 … とても身に付いた
- ・礼儀の習得 … とても身に付いた
- ・授業への満足度 … とても満足している
- ・他者との比較（上手くなっていると思うか）
… とても思う
- ・上手になりたいか … とても思う
- ・やりたいこと … 試合
- ・感想 … 「防具をつけたのがいい体験になった」

Bさんの回答からわかるように、Bさんは自己有能感も高く、意欲的である。しかし2人組で技の習得する時や互いに打ち合う練習の時に強引な行動が多く、Bさんと組むことを嫌がる学習者もいたために、5回目以降の授業ではそういったBさんの行動に対してそれまでよりも注意を促すようにした。

「勝ち残り試合」で小柄なBさんは勢いに乗っ

ていたAさんと当たり、長い戦いの末に一本を取られてしまった。したがってBさんの勝ち数は0となり、非常に悔しそうであった。その後に行った自己評価シートの結果は以下の通りであった。

＜Bさんの自己評価シートの回答・7回目＞

- ・知識の習得 … とても身に付いた
- ・礼儀の習得 … とても身に付いた
- ・授業への満足度 … 満足している
- ・他者との比較（上手くなっていると思うか） … 思う
- ・上手くなりたいか … 思う
- ・やりたいこと … 試合
- ・感想 … (なし)

「授業への満足度」「他者との比較」「上手くなりたいか」の項目に変化があった。この頃には注意を促していた指導者に反抗的な態度を見せるようになっていたBさんだが、活動は変わらず活発に行い、少しずつだが問題行動が減っていた。それだけに勝つことへの気持ちは強く、実践的な試合は1回しか戦えなかったため、もっと試合を経験したかったのだと考えられる。

事例3：自己評価と教師の評価にズレがあるCさん

Cさんは7回の授業のうち、2回見学をしていた。しかし笑顔でいるので体調はそれほど悪そうには見えない。見学をしたことも原因ではあるが、あまり真面目とは言えない授業態度もあって、技能は他の学習者よりもかなり不十分である。Cさんの自己評価（4回目・7回目）の結果は以下の通りで、「やりたいこと」と「感想」以外の選択肢の回答に変化はなかった。

運動技能の高い児童が自らの運動を適切に自己評価できているのに比べて、「運動技能の伸びが停滞している児童にとっては、自己の運動感覚に基づいて行う自己評価は難しい」¹¹⁾ のであれば、中学1年のCさんもまだ自己評価が難しい段階であると推測できる。したがって5回目以降の授業ではそれまで以上に言葉がけをし、他者を観察するように促した。しかし7回目の自己評価シートでも自己評価は変わらず、技能も不十分なままで、

有効な手立てが見つからなかった。

＜Cさんの自己評価シートの回答・4回目・7回目＞

- ・知識の習得 … とても身に付いた
- ・礼儀の習得 … とても身に付いた
- ・授業への満足度 … とても満足している
- ・他者との比較（上手くなっていると思うか） … とても思う
- ・上手くなりたいか … とても思う
- ・やりたいこと … 何もない（4回目）
ウォーミングアップ
（7回目）
- ・感想 … 礼儀がとても身に付いた（4回目）
楽しかった（7回目）

3.7 授業4回目から7回目への変化

授業4回目は、学習者が初めて「試合形式の練習」を行った回である。それまで単独で練習していた「立礼から構え、構えから納刀」を試合前後に行い、習ってきた技を自由に繰り出してよいと言われて学習者は戸惑いを見せていた。「いつ、どの技を出したらよいのか分からない」「目の前にある相手の竹刀が邪魔で打ちに行けない」「防具があると見えづらいし動きづらい」などの意見が授業中にあがり、自己評価シートの感想では防具の窮屈さや着けづらさに関するコメントが見受けられた。7回目の自己評価シートではそのような感想は減り、多数あった「楽しかった」以外に「頭が痛くてつらかったけど剣道が身に付いてよかった」や「とても難しかったけど身に付いたと思う」などのコメントに変わっていた。さらに「やりたいこと」では「試合」と答える学習者が6人（4回目）から12人（7回目）と半数近くに増え、試合の面白さを体験することが出来たようであった。これは特に5,6回目の授業で「しかけ技」や「応じ技」を学んだことで、攻めのパターンが増えたり竹刀さばきを習得したりすることによってもたらされた変化だと言える。また、勝敗が決定される試合を経験したことで「今度は勝ちたい」や「もっと勝ちたい」という気持ちも生まれたからではないかと考えられる。

試合形式の練習を始めると、「一本」となる「有効打突」がどのようにしたら取ることが出来るのかを尋ねてくる学習者も多かった。しかし、授業7回目の「試合」で順番待ちをしている学習者たちが、夢中になって竹刀を振り回して試合をしている者に「残心だよ！」や「もっと声出して！」などのアドバイスともなる声援を送り、声援を送られた本人もそれを聞いて試合の仕方に良い変化が起こったことが度々あり、「有効打突」への理解が学習者に深まっていることがわかった。また、他の運動ではあまり目立つことのない学習者が一本を取った時の周囲の歓声は、本人にとっても指導者にとっても嬉しいものであった。

4 まとめ

「教師に一方的に教えられた技は、実際の試合になると、その技をどのような場面で、どのタイミングで使えばいいのか分からず、技を有効に使うことができない」¹²⁾ ため、試合形式の練習を早い段階で取り上げる単元計画で授業を行ってきた。慣れない動作や防具に苦戦しながらも、最終回には剣道を楽しいと思え、試合をもっとしたいと思える学習者が増えたことは成功だといえる。それだけに、勝敗を決める試合で1戦しか対戦出来ずに勝つことを経験することが出来なかった者を多く出してしまったことは悔やまれる。他者の試合を観察することで、技を繰り出すタイミングや技の活用法を学習し、その学習効果が高かったことを考慮すると、最終回のみならず、もっと早い段階から「見せ合う試合」を行っていたのであれば、さらなる成長を遂げることが出来たのではないかと考えられる。粘り強さや体力、負けず嫌いの性格に頼る勝利ではなく、学習者全員が剣道の醍醐味である、「互いに有効打突を争奪する中で生まれる駆け引き」¹²⁾ を試合で味わうことが出来るようになるのが、剣道授業の理想形といえるであろう。

単元の早い段階で知識を習得できることは、技能向上への近道ともなり得るが、情報量の多さに困惑する学習者や、オリエンテーションや毎時授

業初めの学習者の並び順を一定にしていたこともあり、知識がほとんど身に付いていないと自己評価シートで回答する学習者がいた。情報処理力には個人差があることも考慮して、学習者の並び順に変化をつけて興味を引きつけたり、理解に不安を見せる学習者には技のポイントを焦点化した言葉がけを随時行ったりすることで、全員に行き渡る知識の提供をする必要がある。

自己評価シートの活用は、単元の途中や終了時における学習者の思考や状況の変化について指導者が把握する良い資料となった。しかし学習者への理解や言葉がけの方法には工夫を検討する余地がある。また、研究の対象者が1学級の25名と少ないため、調査結果が学級の特性に強い影響を受けることも否めない。今後は研究対象を増やしつつ今回出てきた課題を改善し、より効果的な授業を実践していきたい。

引用・参考文献

- 1) 10) 12) 橋本大地, 池田拓人 (2018)「中学校保健体育科における攻撃と防御の両方に戦術的課題を設けた剣道授業の有効性」, 和歌山大学教職大学院紀要 学校教育実践研究 No.2 103-112.
- 2) 文部科学省 (2011) 中学校学習指導要領, 87-91, 東山書房
- 3) 4) 6) 柴田一浩, 根本真希 (2015)「中学校における剣道の授業改善の試みと成果」, 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要8巻 1-11
- 5) 8) 9) 11) 大後戸一樹, 木原成一郎, 加登本仁 (2009)「小学校の体育授業における児童の運動技能の評価に関する実践的研究—教師による評価と自己評価および相互評価に着目して—」, 体育教育学研究 25(2) : 1-14
- 7) 中島大貴 (2017)「自尊感情が高まる保健体育科指導法の研究—自己評価能力を育む授業づくりの実践を通して—」 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報 第7号 107-114
- 12) 牧野祥子, 森勇示 (2018)「剣道授業で『攻防の展開』は学べているのか 一事例の批判による検討—」 愛知教育大学保健体育講座研究紀要 No.42.

- 13) 近野巧, (2012) 「運動有能感を高める小学校体育科の授業づくり—教師の言葉がけに着目して—」山形大学大学院教育実践研究科年報第3号, 242-245
- 14) 大後戸一樹 (2010) 「小学校体育授業における運動技能の自己評価に関する事例的研究—教師による評価と児童の自己評価に着目して—」, 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 第59号, 115-124
- 15) 西脇曷祐, 中島弘毅, 月橋春美, 村松香織, 杉山文宏 (2006) 「授業における学生の自己評価に関する一考察 開始時と終了時のスキル向上度について」日本体育学会第57回, 209
- 16) 西本浩章, 木原資裕 (2016) 「体育授業『剣道』で生じる問題点について」, 武道学研究49巻, 55
- 17) 山神眞一, 宮本賢作 (2016) 「小学生の剣道観に関する調査研究」, 武道学研究49巻, 49
- 18) 大江秀和, 宮崎明世 (2017) 中学校柔道授業における「技をかける前の動き」に着目した授業実践の成果と課題 授業後の質問紙調査から, 日本体育学会第68回大会11 (77)
- 19) 八木橋春也, 清水紀人, 藤本俊 (2003), 「楽しさを追求した小学校体育授業に関する検討—教師の評価と子どもの自己評価とのズレに着目して—」, 日本体育学会大会号54, 627